

もくじ 関屋、を名乗った絵師、関屋圭明 … P1
あだち民具図典⑥ 天秤棒 (二) … P3 はい、文化財係です② 西門寺半鐘 … P4

足立史談

第 640 号

2021 年 6 月 15 日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田 5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

「関屋」を名乗った絵師、 関屋圭明

小林 優

俳人、建部巢兆が千住の旦那衆を中心とする俳諧連「千住連」を率い、酒井抱一や谷文晁らと交流を重ねた寛政く文化（一七八九〜一八一八）の頃より、青物問屋の主人で千住連の一員で

もあつた絵師の坂川屋鯉隠をはじめ、現在の足立地域から絵師や書家、俳人、歌人といった文人や、芸術活動を専業とする芸術家たちが多く現れてきます。近年の調査により、そうした足立地域の文人・芸術家の存在は着実に明らか



図1 関屋圭明「冬枯」自画賛
明治4（1871）年 当館蔵（名倉家資料）

かとなり、千住の琳派絵師、村越其栄・向栄親子や、谷文晁門下の船津文淵らの活動が、足立の文化史の中に位置付けられてきました。しかし、作品は確認されど、その他の記録・資料が断片的にしか確認されず、経歴や活動の実態が未だ明らかとなっていない人物たちも未だ多く存在しています。今回はその一人として、「関屋の里」と通ずる「関屋」を号に冠した千住の絵師、関屋圭明（せきやけいめい、一八〇一頃〜没年不詳）について、現在に残る記録・資料類をもとに紹介していきます。

■謎の絵師、関屋圭明の記録 関屋圭明については、その具体的な活動実態に未詳な部分が多いものの、当時の資料や確認された作品から、基礎的な情報があります。

在世中に出された記録としては、天保十三（一八四二）年の『江戸現在公

益諸家人名録』に記載があり、
畫 圭明
名孟釋字士明一號後素軒
千住橋戸町 清水久左工門

と記述されていることから、千住橋戸町に暮らす清水家の人であり、絵師として「圭明」の他、「後素軒」という雅号も持っていたことがわかります。また、確認される範囲においては以前の人名録に名前が見られないことから、おおよそ天保の頃に絵師としての知名度を得はじめて、江戸の著名な絵師、書家、学者などを一覽する人名録に名が掲載されるまでになっていたことが窺えます。果たして圭明が、坂川屋鯉隠や船津文淵のように商家・農家などの本業の傍らに画業を行っていたのか、それとも画業を専業とする絵師だったのかは明らかではありませんが、この人名録への掲載は、絵師としての圭明の認知が如何に広く及んでいたのか、その評価を物語っています。また、戦前の歴史・文化史研究家である島田筑波（しまだつくば）が、坂川屋鯉隠に関する調査成果を著した「名人鯉の隠居 佐可和鯉隠」（『傳記』第二巻第九号（一九三五年九月）所収）の中にも、圭明の名が現れる箇所があります。

島田筑波が鯉隠の素性を追跡する中で、山梨の真言宗寺院、萬勝寺の僧

が文政・天保頃の江戸の書画名家を訪ねて住居氏名を記録したという資料と出会い、その内容を紹介する箇所、

千住の處には四人の画家の姓名住所が記されてある。

千住二丁目 山崎月窓

同かもん宿 佐可和鯉隠

千住河原横道 村越榮之助其榮

同橋戸住 俗称島久、圭明

と、その記述内容を述べており千住の四人の画家の一人として圭明の名があります(同箇所は『足立史談』第三三八号(一九九六年八月発行)にも収録)。天保十一(一八四〇)年に千住河原町に寺子屋を開き、江戸琳派の鈴木其一の門人として画業も行った村越其榮の名があることから、この記録も天保十一年以降のものと思われませんが、これによって圭明が、「島」の一字を冠する屋号を有し、通称の「久左工門」と合わせて「島久」の俗称を持っていたことを窺わせるのです。

■**地域に残る圭明の作品と記録** 以上の様に、「関屋圭明」とは「島久」とも呼ばれた千住橋戸町の「清水久左工門」で、天保の頃に画名を確立した絵師であることがわかりますが、橋戸町の清水家や、清水久左工門の詳細について触れた記録は、残念ながら現在のところ確認されていません。しかし、足立地域に伝来した圭明の作品や、近

年確認された資料から、今一步、圭明について迫ることが出来ます。

圭明の筆による掛軸や屏風といった美術作品は、足立地域の旧家より数点にわたり確認されています。図1に掲げた『冬枯や』自画賛』は、その内の一点で、江戸以来、千住で接骨医業を営む名倉家に伝来した圭明の作品群(いずれも当館寄贈・寄託)の一つです。圭明の師系は定かではありませんが名倉家に伝来した作品はいずれも、俳諧と絵を一つの画面に描く俳画の作品で、俳諧と共に年記や圭明の年齢が自署されています。『冬枯や』自画賛』でも俳諧に続き、「辛未秋日 七十一翁圭明」の署名(図2)が記されており、これにより、数え年を基準として享和元(一八〇一)年に生まれ、且つ少なくとも七十一歳を迎えた明治四(一八七二)年の頃までは活動を続けて、名倉家も含んだ近隣の文化活動にも参加していたという、圭明の生年と活動の時期が推し量れるのです。

また、圭明と同時代の船津文測が残した記録は、圭明が文測ら近隣地域の絵師たちと親しく交友をもっていたことを伝えていきます。文測は、嘉永二(一八四九)年より没するまで、日々の出来事を細かく日記(『菜菔雑記』三冊、

当館寄託)に記録していますが、この中の嘉永六(一八五三)年四月に、

同十五日 曇南風時々小雨

一、自分朝圭明方へ繪巻物かり

二行昼頃帰宅

(註略、次五月)

同七日

一、自分出府朝圭明立寄

繪巻物かへし松魚節二本そへ遣ス

と、圭明のもとへ、恐らくは絵画学習用であろう繪巻物を借用しにいったことを記録しています。これはすなわち、圭明が絵師として単独で行動していたのではなく、近隣地域の絵師・文人たちと深く交友しながら活動していたことを示唆していると言え、圭明もまた、坂川屋鯉隠・船津文測、そして下谷の酒井抱一や谷文晁らが共に活動した「千住の文人活動」の一人であった可能性を考えさせるのです。

■**「関屋」を名乗る千住の文人** では最後に、「関屋圭明」の号について。

圭明は作品に対して「圭明」もしくは「関屋圭明」と署名しており、絵師として関屋圭明の名乗りを持っていることが窺えますが、前述の通り、圭

も雅号であることが分かります。建部巢兆の本姓本名が「藤澤平左衛門」であるように、私淑や師系、地域的な縁から、姓から号を名乗ることは珍しいことではありません。そして千住の文人には、その界限の名勝である「関屋の里」(現千住関屋町付近から墨田区墨堤通二丁目付近)に倣ってか、「関屋」を冠する文人も少なくありませんでした。例えば関屋の里に庵を構えた巢兆も、自身の作品に対して「関屋巢兆」と自署した例が確認されます。また他に、現在の千住関屋町辺りに土地を有し、谷文晁や鈴木其一らと交友した俳人・狂歌師の「里元(本名:橋本立)」も、関わった作品には雅号として「関屋」を冠して「関屋里元(せきやりげん)」と記述しています。

もとより、「関屋」は源氏物語の巻名の一つである歌枕の一語でもあり、地域の名と合わせ、千住の文人にとつて共通の雅語として認知されていた可能性も考えられます。圭明もまた、そのような先人の例に倣い、「関屋」を冠したのかもしれない。

画業と俳諧を行い、幕末から明治に活動した関屋圭明は、千住の文人文化において二つの時代を繋ぐ重要な絵師の一人です。今後の調査を通して、よりその作品と足跡を明らかにしていくことを目指します。

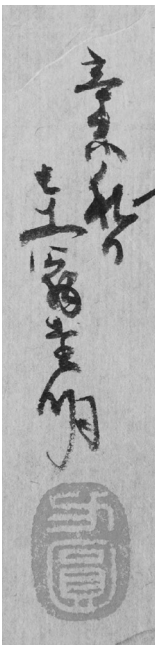


図2 落款
「辛未秋日
七十一翁圭明」

明の本名は「清水久左工門」であり、「関屋」と「圭明」はいずれ

あだち民具図典 ⑥
天秤棒 (二)

下肥を多用した農業が特徴の足立区周辺では、農家にとって天秤棒は欠かせない道具でした。当館の所蔵する

No	全長	中央部 (幅)	先端 (幅)	反り (高さ)	材質等	滑り止め	使用地
1	151.5	6.5	3.7	4.3	杉成型	突起欠損に曲釘	大谷田
2	152.7	7.2	5	2.3	杉丸太成型	釘	大谷田
3	150	6.8	4.8	—	杉丸太成型	突起欠損	不明
4	151	7	4.5	—	杉成型	突起欠損	西新井
5	146 (欠損有)	7	4	2.5	杉成型	突起欠損に曲釘	皿沼
6	150	6.7	3.2	—	杉成型	突起・釘	不明
7	150	7.2	5.2	—	杉成型	突起・突起欠損	不明
8	142 (少々欠有)	6.3	2.5	4	杉成型	釘	江北
9	121	3.5	3	—	樫	突起欠損に金具	江北

単位 cm



【写真上】木の突起のあるもの (元の状態)
 【写真下】木の突起の欠損跡に釘を打ったもの
 (くの字に曲げてある)

天秤棒からその特徴を見てみましょう。

■**形態の特徴** 天秤棒は、肩に当たる中央部が最も太く、両端にいくにしたがって細くなる紡錘形をしています。肩に当たる部分に面を取ることでも重量の負担を減らそうとする工夫が見て取れます。両端から5〜3センチメートルのところに、荷物の縄の滑り止めに突起が付けられています。これ

は、(1) 木を突起として埋め込んであるもの (2) 鉄の釘等を打ってあるもの (3) 木の突起の欠損後に釘等を打ち込んであるもの。の大きく三種類があります。この部分は力がかかるために壊れやすく、(3) の形で処置をしたものがほとんどです。しかし、(1) の欠損がそのままのものもあり、突起は不可欠なものではなく、熟練者ならなくても使用できたと考えられます。

■**自家製と販売品** 天秤棒は比較的簡単なつくりで、自家製する地域も多い道具です。NO2、NO4のように自然木 (丸太) を加工したものは、自家製の可能性があります。とくにNO2は、手間のかかる木の突起の埋め込みではなく、直接釘が打ち込まれており、農家が手作りしやすい作りです。『南足立郡農具図譜』(大正五年) には、「代

価拾式銭 糞類又ハ作物の運送スルニ用ユ」と掲載されており、足立区域では購入が普通に行われていることがうかがえ、現金収入の多かった近郊農村の特徴がうかがえます。

当館所蔵のものは全長はほぼ150センチメートルで、とくにNO3、NO6、NO7は大変似通っていて、天秤棒を製造販売する「棒屋(ぼうや)」の手によるものではないかと考えられます。棒屋とは、鍬の柄や荷車の車軸など、木を加工した道具を作る職人です。

■**足立の天秤棒** 天秤の力を使い重心位置を体の中心位置で受けることで運搬を楽にするものですが、同じ重さであれば棒が長くなるほど体に負担がかかります。肥桶を両端から下げると、一〇センチメートルほどの人が入る間が空きます。足立区周辺での使用に丁度よい長さだったのでしょう。

反りがほとんどないこと、また、丸太に近い形態からも、しなりによって重さを軽減するより、頑丈で、しっかりと重いものを受け止めることが重要視された作りであることが見て取れます。行商のように、一日中担ぐ長距離移動に用いるのではなく、便所から肥溜め、田畑、荷車までといった数百メートルといった比較的短い距離の間で、重い物を運ぶのに適した作りに工夫されていることがわかります。

郷土博物館学芸員 萩原ちとせ

はい、文化財係です ⑳



西門寺半鐘
—小沼播磨守作の名品—

今回は、小沼播磨守が铸造した西門寺(舍人二一三一四)の半鐘(足立区登録有形文化財)をご紹介します。

■西門寺 西門寺は舍人地域の名刹で、浄土宗寺院です。南北朝時代の永和三(一三七七)に、開山したと伝われます。『徳川実記』には、二代將軍秀忠や三代將軍家光が舍人へ鷹狩に訪れたと記録されており、当寺も徳川將軍家とゆかりが深く、家光の位牌が伝わっています。

■舍人宿 舍人宿は、赤山道沿いに存在した宿場で、正徳元年(一七一一)には幕府が千住から舍人までの人馬

継立の賃金を定めており、交通の要衝でした。江戸時代後半には六斎市が立っており、繁栄していたことが知られます。

■西門寺半鐘 半鐘(はんしょう)とは、文字通り梵鐘の半分程度の大ささの鐘のことをいいます。

西門寺の半鐘は、元禄十三年(一七〇〇)二月に铸造されたもので、総高六三センチメートル、口径二七・七センチメートルあり、全体の形もよく整った名品です。現在は本堂に吊り下げられています。

「足立郡舍人町西門寺新掛半鐘銘併序」という文が彫られており、鐘の功德や铸造の趣旨などが述べられています。また、「舍人町」と彫られている点も注目されます。江戸時代に区内で町と表記されたのは「千住町」と「舍人町」のみでした。

■小沼播磨守 香

と「舍人町」のみでした。



No.	作者銘	種類	制作年	所在地
1	正永	梵鐘	延宝八年(一六八〇)	宝幢院(茨城県行方市)
2	正永	梵鐘	元禄四年(一六九一)	聖天院(埼玉県日高市)
3	播磨守	半鐘	元禄十三年(一七〇〇)	西門寺(東京都足立区)
4	正永	水鉢	宝永元年(一七〇四)	勝福寺(神奈川県小田原市)
5	播磨守	半鐘	正徳元年(一七一〇)	遍照寺(神奈川県川崎市)
6	長政	梵鐘	正徳二年(一七一一)	西應寺(東京都新宿区)
7	長政	梵鐘	享保二年(一七二七)	阿弥陀寺(福島県郡山市)
8	長政	仏像	享保五年(一七二〇)	浅草寺(東京都台東区)

取秀真氏の研究によると、小沼播磨守は古代から铸物の産地として知られる下野国天命(栃木県佐野市)から徳川家康が招いたと伝えられ、重政―正永―長政と続いたようです。

しかし、現存作品が少ないため詳細なことはわかっていません。筆者が調べた限りでは、現存作品は左の表の通りとなります。

西門寺の半鐘は「小沼播磨守」としか彫られていませんが、作品の編年からすると、正永の作品の可能性が高いと推測されます。

後述のNo.5以外はいずれも各自自治体の文化財指定・登録を受けており、西門寺半鐘も数少ない小沼播磨守の現存作品として大変貴重なものです。

■文化財の里帰り 西門寺の半鐘は、第二次世界大戦中の金属不足の際、国に供出されることになり、西門寺から去ることになりました。しかし、この半鐘は幸いにも铸潰しを免れ、戦

後の混乱の中で新潟県糸魚川市の善導寺のもとへわたりました。

新潟県の郷土史研究雑誌『越佐研究』に地元中学校の植英雄・永原四郎両教諭が半鐘の存在を紹介したところ、品川区在住の相澤悦二氏に留まり、相澤氏が足立区に連絡したことで話が進展し、善導寺のご厚意により昭和四十四年(一九六九)に西門寺に里帰りしました。

この事例とそっくりなニュースが昨年末に報道されました。川崎市の教育委員会によると、戦時中に供出された半鐘が静岡県で発見され、「小沼播磨守」の名前が読み取れたこと、そして市内の遍照寺のものだったことが判明したそうです。その結果、半鐘は遍照寺に返還されました。

西門寺の半鐘は、文化財の大切さを知る先人たちのご厚意とご尽力により里帰りを果たし、現在も大切にされています。我々も先人に学び、今後も文化財を大切に守っていく必要があります。

【参考文献】

- 香取秀真『日本铸工史稿』(甲寅叢書刊行所、大正三年)
- 相澤悦二「西門寺の半鐘現存」(『足立史談』一八号、昭和四四年)
- 羽田栄太「西門寺」(『足立区文化財調査報告書』一二、昭和五三年)
- (文化財係学芸員 佐藤貴浩)